

部員の地位に止まることはオール組合なる以上断じて認めることを得ないしと之を排斥し、加ふるにその救済方法をさへ考研せざるの行動に出たのである。

茲に竹内の、山下、篠田等に対する反目は廠かべからざるものとなり、彼は復職の見込もなく、生活の補償を得る爲、豫ねて篠田、山下に反対を叫びつ、あつた電車部左翼系に働きかけ、本部兼取衆を潜動して、こゝに刷新協議会の組織に迄発展せしめたのであつた。刷新協議会の行動目的は勿論徹底的本部の刷新にあつたのであるが、當初に於ては恰も單獨組合の結成を目標としたかの如くに見られたのである。事實はアチビラ・ニユースの発行及び協議会の開催等積極的行動に出て、同志糾合、同会趣旨宣揚の爲極めて敏活なる活動を續けたのである。

而して刷新協議会の主張する東交本部革新の目的は、黒一派の大会を開催して東交の更生を計るべしとする主張と相違じ、自ら両者は東交更生大会を同一目標として合流するに至り、五月中旬、刷新の解体を聲明するに至つた。

五 六月十三日開催東交更生臨時大会

自動車部を中心とする、篠田、山下一派は、大会開催反対の理由として、十二月より四月に至る迄の本部費の完納が先決問題なりと言ひ、或は當時の如く極度に対立してゐた本部員間の感情的対立下に於ての大会開催は、徒らに東交の混乱を深化せしむるものであると主張して、全従業員の總意による大会に非ざれば絶体に出席せずと、當時の状勢に鑑みて到底期待し難き條件を以て、目黒派の本部改造の爲にする大会開催延期を固持して譲らなかつたのである。

斯の如く、四月・五月の頃は全く東交の内紛は最高潮に達し、目黒派、篠田派の対立に加ふるに刷新協議会之に鼎立して互に暗躍する状勢を見ては、或ひは大会開催の運びに迄至らずして、東交は自壊するのではないかとさへ思惟せしめたのであつた。

此の間に舉行された五月一日の第十四回メーデーに當つては、東交は左翼派メーデー行進の司合団体であつた關係上、その内憂を隠して、労働者戦線統一の虚空な示威に約九百名の従業員を各派より参加せしめたのである。